

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

オクラ～子どもにとっての間引き～／神戸女子大学高倉大附属高倉台幼稚園（兵庫県）

長期の計画を立てる際に、植栽はどのような観点で選んでいますか？今回は、子どもたちの実態や専門家のアドバイスで、植栽にオクラを選んだ実践です。

保育者は、子どもらしい感性から生まれた言葉による表現や、表情やしぐさにも注目し、大切に受け止めています。子どもたちが、オクラの気持ちになったり、友達と関わったりすることで、オクラへの興味や愛着心を深めています。



○ オクラを育てる／4歳児

- 子どもたちの希望を聞き、附属している大学の研究室のM先生のアドバイスをいただいて、4歳児が取り組む植栽としてオクラ（小さな種・花の色や大きさ・実の形や付き方・切った形の面白さなど、子どもたちが生長を楽しめる）を選び、種から育てることになった。
- 事前に子どもたちの取り組みを予想して計画を立て、保育者同士でよく話し合った。保育者自身が栽培活動を楽しみ、子どもたちの姿を見守りながら援助していくことを大切に。特に、4歳児はまだ言葉で思いを表せない子どももいるので、言葉だけに焦点を当てるのではなく、表情やしぐさもその思いの表出として、大切に受容することに留意した。

✦ 事例1「オクラの芽出たよ！」（6月初旬）

- 登園してすぐに「先生、土の所に芽があるで！」と、Aちゃんの声が聞こえた。Aちゃんが靴を持ったまま、遊戯室前にあるオクラの鉢の前から呼んでいた。そばにいた幼児も、担任と一緒に遊戯室前まで走って行き、「先生見て！一人できてる（芽が出てる）」「私のは二人！」と嬉しそうに話す。
- 自分の鉢と友達の鉢を見比べて、「わあ！Yちゃんのは5人おる！いいな！」「5人家族やね！」と話をする姿があった。
- その中でBちゃんが黙って自分の鉢をじっと見つめていた。保育者が傍に行き、「どうしたの？」と尋ねた。

Bちゃん：「僕のはまだ出てない」

保育者が「Bちゃんのオクラの赤ちゃんどうしてるのかな？」と、友達に聞くと

Cちゃん：「土の中でまだ寝てるんじゃない？」

Dちゃん：「お水いっぱいあげたら絶対に大きくなるで」

- 「お水あげよう！」と3人でタライを運び、「先生もお水入れとってな」「カップとか持ってくるから」と、自分たちで水やりの準備をして、早速始めた。Sちゃんは黙って何度も何度も自分の鉢に水を注いでいた。保育室に戻ると、Bちゃんが急に保育者の傍に来て耳元で「明日、大きくなってるかな？」と聞いてきた。「お水いっぱい飲んだから、きっと大きくなってるよ」と保育者が言うと、笑顔で頷いていた。



❖ 事例2「間引き～M先生（オクラ博士）との交流～」

- 大学のM先生は、子どもたちを見守る温かいまなざしで、園庭や身近な自然の中を子どもたちと共に散策しながら、さりげなく子どもたちの「なぜ」をいっぱい引き出し、受け止めてくれる。来園される度に、子どもや保育者のオクラの世話を仕方を認め励ましてくれていたので、子どもたちから「オクラ博士」と呼ばれるようになった。
- 「オクラがいっぱいになってきてる。なんかギユウギユウ」と話していた4歳児の相談役に、M先生がなってくれる。オクラ博士は、ツバメの家の話に例えて間引きの話をした。さらに子ツバメの成長に例えながら、「オクラたちね、1本だけにしておくと、土の中からいっぱい栄養をもらえるんだよ」と説明する。
- 間引きの日のこと、Sちゃんが「あのな、オクラ博士が教えてくれたで。一人にしたら、お家が広がるやろ？そしたら栄養がいっぱいもらえるから大きくなれるんやで」と言った。すると、Iちゃんが「他の子は違うお家に引っ越しさせてあげたら？」と言った。
- 保育者が「どこに引っ越しさせようか？」と問いかけると、「お家がギユウ！だから大きくなれる広いところ」や「ペットボトルに色を塗つたから、きれいなお家になるから喜ぶ」と次々アイデアが出てきた。
- 水やりをしてしばらくすると、水やりを終えたRちゃん和Iちゃんが、大きなプランターの前で、「先生、新しいお家ここにしたら？」と提案した。
- 間引きする時は、保育者が唖然とするぐらい優しい手の動きで抜いていた。「先生、こうやって土のとこをそっと押さえておくねんで」と、実際に間引きしながら、小さな指先を器用に動かして保育者に手本を示してくれた。そして、間引いた芽も優しくそっとプランターに植え替えていた。



❖ 事例3「台風来るから、オクラ怖がるかもしれへん！」（7月中旬）

- 「今日は、風がビューって強いでしょ」と保育者が言いかけると、Rちゃんが「知ってる！台風が来るんやで」「雨もいっぱい降るんやで」と教えてくれた。すると、少し傾いて生えている自分のオクラを見たKちゃんが、「僕のもの、台風でちょっと倒れてる！」と言った。
- クラス全体の場で、Kちゃんにオクラのことを話してもらった。「どうしたらいいかな？」と問いかけると「部屋の中に入れてあげよう！」「窓も戸も閉めよう」という声があがった。そして、ロッカーの上に置くことになった。
- 各自ロッカーの上をきれいに掃除し、新聞紙を4つ折りにして敷く。まだ雨が降り出していなかったのですが、昨夜からの雨水を含んで重くなったオクラを保育室に運び入れた。じっくりオクラを見ていたEちゃんが「先生！何かできてる！」それを聞いて全員が、自分のオクラを見に行っった。「私のもあった！」「3つもあったよ」と、次々と嬉しい報告が続く。「何やろね？面白い形やね」と言うと、「もしかしてオクラの赤ちゃん違う？」
- 「えっ、オクラと違うみたいやで」「花の蕾と違うか？」どうやら、数日前にオクラ博士から教えてもらったことを思い出したようである。ロッカーに置き、オクラを上からではなく真正面から見たことで、新たにオクラの花の蕾を見付けることができた。
- 台風後は、どこに置くか話題となり、「（オクラは）お日様が好きやで」「明るいところに置こう」と言いながら鉢を園庭に運び出していた。
- その後、夏休みは各家庭に持ち帰ってオクラを育てた。夏季休業前のクラス懇談会では、保護者を対象にオクラの世話を分かりやすく、オクラ博士に説明してもらった。休業中、各家庭では、オクラの収穫や調理の場面など、家族の話題として盛り上がったとの報告が多くあった。
- 4歳児は、自分たちで収穫した新鮮なオクラを、すぐに保育者と給食室に運び、その日のうちに給食メニューに加えてもらった。「オクラ、美味しいわ！」「あっオクラ、星の形してる！」「きれいな緑色やな」の感嘆の声とともに、おかわりの列に並ぶ子どもたちが多かった。



✦ 振り返って

- オクラという野菜の栽培活動から、4歳児の「科学する心」の育ちの新たな一面を知ることができた。4歳児は、5歳児に比べるとまだまだ幼いとの先入観が保育者にはあった。しかし、今回のオクラの発芽から収穫に至るまでのプロセスに関わったことで、この観念は取り除かれた。発芽するまでは、毎日繰り返し植木鉢の前に座り込み、じっと土を見続けた根気強さ、台風から守るために保育室に運び入れた優しさ、棚の上に鉢を置いたことで見付けたオクラの芯の蕾に対する驚きなどは、4歳児がオクラに抱いている愛着から生み出されたものと推察される。
- 子どもたちが、オクラを多様な視点から観ていくことの重要性を、これらの姿が示唆してくれた。鉢の傍に座るだけでは、ひとつの角度からの生長しか観えてこないが、時には逆の発想で、鉢を持ち上げて下から観てみる。この柔軟性が、保育者の「パターン化した栽培活動の殻」を打破してくれた。
- オクラ博士の専門性は、知識で留まることなく、栽培活動の知恵として、保育者だけでは、子どもの活動として踏み込めなかったかもしれない「間引き」に子どもたちと共に挑戦させてくれた。
- 間引きした小さな苗さえも、子どもたちは、引っ越し先を見付けて大切にする姿に、子どもたちの心の育ちを感じた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」